

マシュー・アーノルド

## 2 聖ブレンダン

聖ブレンダンが北の海に向かう  
仲間の聖人たちは船出を祝福する  
ブレンダンは今一度皆に別れを告げて 船を出す  
こんな冬の季節にこんな荒れた海を 気でも狂ったか

吠える海を渡って 5  
冬の夜な夜な 尼僧院の鐘の音が響き  
波に洗われるヘブリディーズの島々に  
僧院の灯りがきらめく

北へ北へと聖ブレンダンは向かう 10  
もはや 鐘の音も届かず 僧院の姿も見えず  
飛び交う北極の星々が迫ってくる  
在るは 前人未踏の岸辺を取り巻く北極の海

ついにその時が来た クリスマスの夜だった 15  
昼の嵐が過ぎ 夜空に星が輝いていた  
白々とした一塊の氷の山が漂っている  
その上に 何と 人がいたのだ

そわそわとした物腰と睨みつけるような目つき 20  
ばさばさに垂れ下がった赤毛  
ああ ブレンダンはどこに身を隠せよう  
裏切り者ユダが地獄から逃れてきたのだ

恐怖にこわばったブレンダンは身動きできなかった  
月は明るく 氷の山が迫り来る  
控え目に囁くような声がした 「お待ちを  
われは 神の許しを得てここにいる

「聖人よ しばしお待ちを 25  
地上では わが罪とわが滅びは皆の知るところ  
わが名は万人の呪いの的<sup>まど</sup>  
だが その身にも小康のひと時あるをお伝えください

「ある聖なるクリスマスの夜だった  
地獄に来て初めてのことが  
永遠の炎の中でわが罪を悔い  
狂乱と怨念に包まれて 自害を口走っていた

30

「天なる力の拷問に苦しむ魂たちに混じって  
みずからの苦痛に身もだえていると  
天使がわが腕に触れて 言われた  
『さあ地獄から出て行って しばし身心を鎮めるがいい』

35

『『どうしてこのようなご慈悲を』とたずねると  
天使は言われた 『ヤッフアで 道行く人に慈悲を乞うていた  
癩病患者のことを覚えていよう  
おまえが情けをかけた者のこと』

40

「わたしは思い出しました  
ヤッフアの表通りを歩いていた時のこと  
焼け付くような埃ほこり混じりの熱風が吹き荒れる  
ある朝のことだった

「癩病患者が一人 道端にすわっていた  
熱で躰を震わせる裸の年寄りだった  
砂埃すなほこりが踵かかとから脳天まで痛む傷口を容赦なく打ち  
熱風で躰の熱は五倍にも上がっているやに思えた

45

「わたしが前を通り抜けようとする  
じっと見つめて 『お助けを 死にそうです』と呟いた  
わたしは その哀れな者に外套を放り投げ  
安堵した様子を見て さっさとその場を立ち去った

50

「ああ ブレンダンよ 神のご慈悲の大きさを思うがいい  
わたしのようなちっぽけな善行でさえ  
こんな計り知れないお恵みがあるのだから  
立派な善行を積みばどんなに大きな祝福がえられることか

55

「衣食足り 友にも恵まれた者として  
たったの一度 たまたまその善行をなしたまで  
その後すぐに 人殺しと嘘つきの道をまっしぐら  
わが善行など忘却の彼方

60

「慈悲なる胎内に宿りし

かの親切心の芽は消えることなく  
わが罪と死を生き抜き  
地獄の業火に包まれしこの身の友となった

「年に一度 地上で  
賛美歌がクリスマスの夜の静けさを包むとき  
罪人どもが臥す地獄の湖沼の淵より立ち上がり  
わたしは 癒しの雪の世界に旅して来るのだ

「わたしは この胸の燃える炎を氷で鎮め  
渦巻く脳を沈黙の世界で癒すのだ  
ああ ブレンダンよ この安らぎのひと時に比べれば  
ヤッフアの癩病患者の安堵と言えど苦痛に等し」

聖ブレンドンの目に涙が溢れ  
聖人は頭を垂れて 祈りをつぶやいた  
目を上げると 眼前にあるは  
凍てつく空と氷の山 だがそこにユダの姿無し

(山中光義訳)